

虚空と色について

飯 岡 祐 保

始めに

『俱舍論』では、虚空は無為法で、隙間は、色であるとも言う。何が色で、虚空は、色なのか。無為法なのか。『アビダルマディーパ』では、どうか。これらのことを確かめたい。

1. 色とは何か

rūpaṃ dvidhā // I-10a // varṇaḥ saṁsthānaṃ ca / ¹⁾

色とは二種類、顯色と形色である。

1. 1. 四大

顯色について、

kathaṃ vāyau varṇasadbhāvaḥ / śraddhānīyam eṣo 'rtho... / ²⁾

風に色彩がどのようにあるのか。それは、…信じる意味である。

水に色彩と形があるか。

炎について

jvālāsabdasaṁtānayoḥ gacchati gamanābhidhānavat / ³⁾

炎と声の連続状態は行く。行きつつあるという表現のように。

炎の前後は別々で、その認識が連続状態である。

地について、

prthvy eva hi bhājanākhyā tasyāṃ tejojalavāyubhir virodho na prthivyeti / ⁴⁾

地こそは、入れ物と言われ、それと水火風は相反しない。

形は無い。定義の不成立となる。

結局、

agnir eva hi tatprajñāpteḥ kāraṇaṃ / ⁵⁾

火こそは、それが表示される事の原因である。

(168)

虚空と色について（飯 岡）

となった。

色（四大）は、顯色でも、形色でもなくそれが「表示される事の原因」である。

1. 2. 所造色

cakṣurādini pañca varttamānaviṣayatvāt...bhautikārthyāc catuṣṭayam // I-23b//⁶⁾

眼等五〔根〕に、現れている対象となるから…所造色（色香味觸）は対象であるから、四である。

所造色を対象とする根は、

śeṣā rūpiṇo navabhautikāḥ // I-35b //

pañcendriyadhātavaś ca catvāro viṣayāḥ / ete nava dhātavo bhautikā eva /⁷⁾

〔四大種以外の〕残りの色は九大種で造られたもの（bhautika）五（眼耳鼻舌身）根の界と四境（色香味觸）これら九の界だけが六種で造られたものと言う事。

そして、眼は、

uktaṃ ca sūtre cakṣur bhikṣo ...rūpyanidarśanam sapratighaṃ evaṃ yāvat kāyaḥ /⁸⁾

經に言う。“ピクよ。眼は、…色を示し、遮るものをもつ。このように、身体（根）に至るまでもある。

「遮るもの」とは、

...svadeśe parasyotpattipratibandhaḥ /⁹⁾

「自分の居場所に他のものが生じる事によって妨げられること」、（空間占拠）である。

三種類がある。

pratigho nāma pratighātaḥ / sa ca trividhaḥ / āvaraṇaviṣayālaṃbanapratighātaḥ /¹⁰⁾

「遮る」とは、「遮るもの」を持つからなのである。それには、三種類がある。覆うもの、〔外の〕対象〔内の〕対象を「遮るもの」を持つ。

ところで、〔内の〕対象とは心のことで、それを「遮るもの」は、何か。

それは、

yasmin yasya kāritram sa tasya viṣayaḥ /¹¹⁾

その作用（遮る）がそこにあれば、それがその対象となる。

「空間占拠」は消去され、作用となった。

sahabhavo 'pi tu siddhaḥ / tadyathā cakṣurvijñānādīnām cakṣūrūpādibhir bhūtabhautikānām ca tatrāpi pūrvam indriyārthau paścād vijñānam /¹²⁾

しかし、共に存在することが成り立つとしても、例えば視覚等は、大種と大種で造られたものである眼等と色等がともにある場合に、そこでも前に感覚機能（根）と対象（境）とがあって、後に認識作用がある。

「所造色」は採られない。替わりに、「二によって〔前後差の〕識生ず」となる。

1. 3. 極微

aṣṭau dravyāṇi catvāri mahābhūtāni catvāri rūpagandharasaspraṣṭavyāni / ¹³⁾

〔極微は〕八実体で四大と色香味觸の〔とで出来ている〕四所造色。

所造色が否定され、それで出来ている極微もない。

1. 4. 無表色

yady asti tac ca mahābhūtāny upādāyety uktam / tat kiṃ vijñaptimahābhūtāny evopādāyāvijñaptir
utpadyate athānyāni / anyāny eva sāmābhūtāny upādāyotpadyate / ¹⁴⁾

もしも、〔四〕大種とそれで造られた色があると主張するとすれば、大種の表業とそれで造られた色である無表色は、別なものとして生じるのか。

それは、全く大種とは別で、大種で造られたものとして生じる。

所造色で出来た無表色はない。

2. 虚空とは何か

cchidram ākāśadhātuvākhyam // I-28a //...ālokatamasī kila // I-28b //

...tasmāt kilākāśadhātur ālokatamaḥ svabhāvo rātriṃ divasvabhāvo veditavyaḥ / ¹⁵⁾

隙間は虚空界と言われている。…光と闇と伝え聞く。…なぜなら、虚空界は光と闇が固有性と伝え聞き、夜と昼が固有性と知る事ができる。

隙間として、遮る空間で、色と呼ばれたものは、已に、「空間占拠」は否定され、無為法なら昼夜はない。

無為法とは、

asamskṛtasyāpi ca svalakṣaṇe sthitibhāvāt / ¹⁶⁾

無為〔法〕もまた、それ自身の特徴を住であることとしているから。

その住と有為法の関係は、

sa eva pravāho 'nuvarttamānaḥ sthitiḥ / tasya pūrvāparaviśeṣaḥ sthityanyathātvam / ¹⁷⁾

それこそが流れであり、住はそれに伴っている。その前後の差異が、住異である。

虚空が昼夜ならば、有為法で、時である。

有為法についての世尊の言葉がある。

...bhagavatā "saṃskṛtaṃ nāma yad abhūtvam bhavati bhūtvā ca punar na bhavati yaś cāsyā
sthitisaṃjñakāḥ prabandhaḥ so 'nyathā cānyathā ca bhavati "ti / ¹⁸⁾

…世尊は、「有為〔法〕とは、無かったものが有り。有り終わって二度と無いこと、それは住という表現が、繋がれてある事 (prabandhaḥ) で、それが別々になること」とおっしゃった。

(170)

虚空と色について (飯 岡)

生滅の繋がり、連続状態 (saṃtāna) であり、「別々になること」は、変化 (pariṇāma) である。その前後差 (viśeṣa) がある。

「覆われない虚空を色が行く」とは、「無かったものが有り、有り終わる」連続状態 (saṃtāna) の住 (sthiti) が流れとして、前後差 (viśeṣa) のある住異という変化 (pariṇāma) を表す (saṃtatipariṇāmaviśeṣa) 事に成る。

3. 『アビダルマディーパ』の場合

ākāśaṃ ca sarvabhūtabhaumikarūpādhāraṃ iti tad apy atrāstiti / svalakṣaṇadhāraṇād vā tad dhātutvam / ¹⁹⁾

また、虚空 (ākāśa) は、一切存在物の基礎となる色の依持 (sarva-bhūta-bhaumikarūp 'ādhāra) であるので、この「十八界」中に、この「虚空」はあると「説かれている」。あるいは、自己の相を維持する (svalakṣaṇa-dhāraṇa) から、この「無為」は界である ²⁰⁾。

khadhātuḥ pṛthagākāśād rūpāyatana-saṃgrahāt / ²¹⁾

「14cd」空界 (kha-dhātu) は、色処の摂 (rūp 'āyatana-saṃgraha) であるから、個別の虚空 (pṛthag-ākāśa) とは「別である」²²⁾。

ākāśaṃ hi dharmāyatana-saṃgrhītaṃ nityaṃ ca / ākāśadhātus tu cākṣuso rūpāyatana-saṃgrhītaḥ ālokatamaḥ svabhāvo varṇaviśeṣo vātāyanacchidrādyabhivvyaktarūpaḥ / ²³⁾

なぜなら、虚空は法処に摂せられ、常住 (nitya) であるが、空界 (ākāśa-dhātu) は目で認識され (cākṣusa)、色処に摂せられ (rūpāyatana-saṃgrhīta)、明暗 (āloka-tamas) を自性とし、特殊な色 (varṇa-viśeṣa) をもち、風の通る隙間 (vātāyana-cchidra) などの明瞭な色 (abhivvyakta-rūpa) である ²⁴⁾。

「15」 nabhaḥ khalu nabho dhātor āsanno hetur eṣa tu / bhūtānāṃ tāni tajjasya rūpasyāyat tu cetasaḥ // ²⁵⁾

「15」虚空 (nabhas) は「無為」であるが、実に、空「界」は界と密接に結びついた (āsanna) 因 (hetu) である。この「空界」は「四」大種の「因であり」、これら「四大種」は、これより生じた「四大所造の因であり」、その「四大所造」は、色の「因であり」、その「色」は心の「四蘊の因である」²⁶⁾。

これは、前後関係で所造色を否定した Vasubandhu とは違う。

ādheyenādhāraprajñāpanāt / sarvasya khalu saṃskṛtasya mūrtikriyāpratilambhe gagaṇa(na)m ādhāraḥ / ²⁷⁾

なぜならば、置くこと (ādheya) によって、置かれる場所 (ādhāra) を認識する (prajñāpana) からである。実に、一切の有為の形 (mūrti) と作用 (kriyā) が認識される (pratilambha) とき、虚空 (gagaṇa) は置かれる場所 (ādhāra) となる ²⁸⁾。

『アビダルマディーパ』の虚空 (ākāśa) は、一切存在物の基礎となる色の依持 (sarva-bhūta-bhautikarūp 'ādhāra) である。色と虚空との関係は 置くこと (ādheya)

によって、置かれる場所 (ādhāra) を認識する (prajñāpana)。このことは、この「空界」は「四」大種の「因であり」、これら「四大種」は、これより生じた「四大所造の因であり」、その「四大所造」は、色の「因であり」、その「色」は心の「四蘊の因である」。となつて、因果が前後関係でなく同時であり、一切の根源である。

4. まとめ

『俱舍論』では、虚空は無為法である。しかし、定義「光と闇」が色と共通する。色は、顯色、形色でなく、「表示される事の原因」と判明した。「遮るものをもつ」色は、「空間占拠」するが、心の対象には無く、作用がある。所造色については、根と対象が共にある場合に、「前に感覺機能（根）と対象（境）とがあつて、後に認識作用がある」とされ、「二によって「前後差となる」識生ず」が確立される。俱生の所造色は無い。見えない極微は、認められない。無表色は大種で造られたものとして生じるとされ、所造色が無いのだから無い。

昼夜という時間を固有性とする虚空は有為法となり、連続状態の変化の差異 (saṃtatipariṇāma-viśeṣa) である。

虚空は D.P. では無為法で、全てを網羅する。色法でもあり、心・心所法でもあり、心不相応行法でもあることになる。

- | | | | |
|--|---|----------------------------------|-------------------------------------|
| 1) Akbh.p.6 ⁷⁻⁸ . | 2) Akbh.p.53 ¹⁴⁻¹⁵ . | 3) Akbh.p.473 ²⁰⁻²¹ . | 4) Akbh.p.190 ²⁰⁻²¹ . |
| 5) Akbh.p.462 ¹⁵ . | 6) Akbh.p.15 ²⁴ -16 ² . | 7) Akbh.p.23 ²²⁻²³ . | 8) Akbh.p.24 ³⁻⁴ . |
| 9) Akbh.p.19 ⁷⁻⁸ . | 10) Akbh.p.19 ⁶⁻⁷ . | 11) Akbh.p.19 ¹⁵⁻¹⁶ . | 12) Akbh.p.145 ¹⁴⁻¹⁶ . |
| 13) Akbh.p.52 ²⁴ -53 ¹ . | 14) Akbh.p.199 ¹¹⁻¹² . | 15) Akbh.p.18 ¹²⁻¹⁶ . | 16) Akbh.p.76 ⁵⁻⁶ . |
| 17) Akbh.p.77 ⁶⁻⁷ . | 18) Akbh.p.78 ²⁻⁴ . | 19) D.P.p.6 ²⁻³ . | 20) 『ディーパ研』 p.248 ⁸⁻¹¹ . |
| 21) D.P.p.13 ² . | 22) 『ディーパ研』 p.262 ⁴⁻⁵ . | 23) D.P.p.13 ³⁻⁵ . | 24) 『ディーパ研』 p.262 ⁶⁻¹⁰ . |
| 25) D.P.p.13 ⁶⁻⁷ . | 26) 『ディーパ研』 p.262 ¹¹⁻¹⁵ . | 27) D.P.p.13 ¹¹⁻¹² . | 28) 『ディーパ研』 p.263 ⁷⁻¹⁰ . |

〈略号〉

Akbh: *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu* ed by P. Pradhan, PATNA 1967.

D.P: *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti critically edited with notes and introduction by Padmanabh S. Jaini*, PATNA, 1977.

『ディーパ研』: 『アビダルマディーパの研究』三友健容, 平楽寺書店, 2007 年.

〈キーワード〉 色, 四大, 所造色, 有為法, 虚空

(東京大学大学院修了)